



桑実寺縁起絵巻

滋賀県立近代美術館
主任学芸員 國賀由美子

はじめに

滋賀県蒲生郡安土町にある桑実寺は、きぬがさやま 繖山（観音寺山）の山腹に本堂が建っています。繖山の西側には安土山が連なり、そのさらに西側には西の湖が広がります。戦中戦後に食糧を増産するため、このあたりの湖は大規模な干拓が行われましたが、それ以前は安土山の北側を取り巻くように小中の湖が、さらに北側には大中の湖が広がり、繖山は西から北側にかけて水景に囲まれた土地であったといえましょう。

桑実寺に伝わる桑実寺縁起絵巻は、おくがき 奥書や周辺ほつがんしゃの記録から制作年や発願者、絵と詞（絵の内容を伝える文章）の執筆者もわかる貴重な絵巻物で、重要文化財に指定されています。繖山とその周辺が、先に述べた実景に近いかたちで描写されることでも注目を集めていますが、当時としては斬新な視覚のこの絵を描いたのは土佐光茂（1496頃～1572以降）という宮廷の絵所預として活躍した絵師でした。詞を執筆したのは上巻第一段のみ後奈良天皇（1496～1557）、ほかは青蓮院宮尊鎮法親王（1504～50）、さんじょうにしきねたか 三条西実隆（1455～1537）の



上巻 奥書

よりあいがき 寄合書で、尊鎮法親王は後奈良天皇の弟にあたります。ただ絵巻のトップを飾った後奈良天皇以外は、どの部分を尊鎮法親王と実隆のどちらが担当したかについて、研究者により意見が分かれています。また、奥書の筆者についても、諸説があります。

当時細川氏の乱を避けて桑実寺に避難していた將軍足利義晴（1511～50）が絵巻をつくることを発願し、享祿5年（1532）1月から6月にかけて制作され、7月29日に天文と改元あった後の8月17日に、本尊薬師如来の帳中に奉納されていることが、詞の執筆者三条西実隆の日記『実隆公記』からわかります。上下2巻からなり、上巻4段下巻3段のあわせて7段の構成ですが、これは七仏薬師の七という数字に準拠したものです。

それでは、順を追って絵巻の内容をみてゆきましょう。

絵巻の内容

上巻

第一段：この段のみ詞は後奈良天皇の執筆で、料紙に金泥による装飾下絵が見られます。内容はある時海上に一株の桑木が生出で、三つの実を結びました。そのうちの二つは、日光月光両菩薩の垂迹である金の鳥と白い兔です。残りひとつは地に落ちて、桑実山（繖山）となりました。かたちは天蓋のようで、繖山と名付けられたのです。聖徳太子が33歳の厄難を払うために、千手観音像を安置し精舎を建て観音正寺と称しました。一方の桑実寺は、病消滅の靈場、不老不死の仙窟で、眺望不思

議の勝地、利生の著しい所です。本尊薬師如来の来由について録してゆきましょう。と、絵巻の導入部が語られます。

絵を見ると、上方に金の鳥と白い兔を遊ばせながら、桑の大木が堂々と描かれ、さらに続いて霞に隔てられた次の場面には、観音正寺らしき境内が広がっています。生気に溢れる巨木の表現は、来る桃山時代の絵画の特徴を先取りしたものと評価されます。

ここで桑の大木は扶桑朝（日本）の大樹（將軍）をさし、桑実寺にいた足利義晴を暗示しています。また観音正寺のことが語られるのは、当絵巻への六角氏の関与を示すものとみられます。將軍義晴は、織山に居城観音寺城があった六角定頼の経済力と軍事力を頼みに、この地に避難し居を定めたのでした。

第二段：天智天皇の代に、志賀の都に五種の靈病がおこりました。天智天皇第四皇女の阿閉皇女も病に罹り、夢をみて「琵琶湖の上に『妙音観世音、梵音海潮音、勝彼世間音、是故須常念』という浪の声がした。その声のする方を見ようとすると、瑠璃の光が七方に射し、その光は七層の灯火のように重なっていったと思うと、夢から覚めた」と言いました。

この場面の絵は、吹抜け屋台といって天井を取り払ったかたちで描かれる屋内描写です。平安時代の絵巻物を踏襲した華麗繊細で優美な画面は、「都」を意識したものと思われま

第三段：天智天皇は奇異の思いをなし、御持僧の定恵和尚を粟津の宮に召して尋ねました。定恵は「琵琶湖は琵琶を尊形とする弁財天の浄土である。昔役行者富士絶頂に登って八方を見渡すと、西方に瑠璃の琵琶が一面あり、傍らに碧羅の天蓋があった。琵琶は近江の湖、天蓋は織山であった。弁財天は八大龍王の変化。湖水の下は竜宮城である。釈迦は転法輪のとき、祇園精舎に生身の医王善逝（薬師如来）を勧請して安置し、入滅百年の後これを

竜宮王の海蔵に納めた。姫の病は今流行っている病を調伏するために、弁財天の擁護によって医王が出現し、病はたちどころに治るといふ随夢である」と語りました。

絵は御簾越しに足下のみしか見せない上畳に坐す人物が描かれます。この表し方は天皇を描くときの常套手段です。

第四段：天智天皇は、姫が光を見たというところ（粟津の湖岸）に七光寺を建立し、定恵和尚に臨時の法会を修させました。竜宮城の東門にあたる粟津の磯部に生身の薬師如来が光明に輝いて湖上に現れ、その光の中に無量の化仏が現れて光は姫の衣の中まで達し、病は速やかに平癒して、天皇も健康であり、国内病苦の者もみなこの光明に照らされて病痛を免れました。天皇・皇后以下群臣百僚、みな随喜の涙を流したのです。

絵には濃彩で華麗に法会の場面が描き出され、光茂の非凡な才を示しています。画面の先には薬師如来の出現と、その光明で病の癒えた皇女の居所が、さらに先には唐崎の松が描かれて上巻巻末を迎えます。唐崎の地は天智天皇の大津京遷都と深く関わり、遷都後に大和三輪明神を日吉大社に勧請した際、まず唐崎に影向したとされます。大津京遷都の拠点と考えられる唐崎は天智天皇ゆかりの地であり、將軍義晴にも大きく意識された土地だったのでしょう。



上巻第四段 七光寺の法会

下巻

第一段：やがて、帝釈天の化身である大白水牛一頭が現れて薬師如来を乗せ、八大菩薩や童子らがこれを圍繞し繖山の西の磯まで送り届けました。ここからは梵天王が天下って岩駒と化し如来を乗せ、一瞬の間にこの山に飛び移ったのです。瑠璃石の面に岩駒の蹄の跡が、歴然と今に残っています。精舎はすみやかに建立されて、白鳳6年11月8日、定恵和尚を導師として薬師如来を安置しました。以来参詣の輩は絶えず、利生方便、威徳自在。皆もって満足しました。

この場面にはパノラマのように田圃が俯瞰描写され、そのうち続く様、畦道の連なりが造形的な面白さを見せています。絵師光茂の非凡な造型感覚、視覚の斬新さは、新しい時代の到来を予感させます。続いて俯瞰描写の続くうちに堂舎の落慶供養の様子が描かれ、最末部には瑠璃石に降り立つ薬師如来と岩駒が、まるで空中写真のように見降ろされて表されます。



下巻第一段 薬師如来を乗せた岩駒と繖山近隣の田圃

第二段：その後阿閑皇女はこの山に登り瑠璃石の足跡を拝みました。皇女は即位し元明天皇となり、治世八ヶ年万民は徳に帰しました。在位八年というのは法華の説時を表示しています。当寺信仰の人は竹生島にも参詣すべきで、元明天皇がそうすれば一天泰平、国土豊饒となりました。元明天皇は諱を豊国成姫といい、この浦をまた、豊浦と名付けました。

画面はやはり鳥瞰して桑実寺の仁王門から

参道一帯、そして伽藍が微細に描き出され、真景図といってよい表現です。その背後には山間の道を行く元明天皇の行幸が描かれ、天皇を乗せた鳳輦は今まさに瑠璃石の前に据えられたところです。实景の描写を重んじた光茂の本領がここにも発揮されています。

第三段：日光・月光菩薩、十二神将は各々七千夜叉を従え、都合八万四千十二騎の随兵をたなびき昼夜悪魔外道を近づけません。誰が本尊薬師如来とこの寺を仰がないことがありますでしょうか。まさに今縁起の旧草をとり拾い、これを後素（絵画）に表しました。

両菩薩と眷属たちを描くこの段は、光茂が仏画にも秀でていたことを語っています。細緻な線描の表現、華麗な彩色は、光茂が宮廷絵所預という地位にあったことと無関係ではありません。

絵巻の制作事情－將軍足利義晴とその周辺

さて、この絵巻の制作を発願した足利第12代將軍義晴は悲劇の將軍でした。永正8年3月5日第10代將軍義澄の子として、近江蒲生野北辺、牧の岡山城（近江八幡湖岸、義澄を奉じた九里氏の居城、佐々木六角氏により落城）に生まれ、播磨守護赤松義村のもとで養育され、大永元年（1521）12月、11歳で管領細川高国に擁立され將軍となります。同7年2月には柳本賢治や三好政長ら反高国勢力により京を追われ、高国に奉じられて六角定頼付随のもと守山や武佐長光寺を経て坂本に逃れました。一方、細川晴元は足利義惟を奉じて阿波から堺に進出し京をおさえ、10月に義晴・高国は京に戻りますが、晴元との和議は成立せず、義晴・高国はまた近江に退き各地を転々としします。その後朽木で2年5ヶ月を過ごし、享祿4年（1531）葛川から堅田、坂本へ移りますが、6月には高国が晴元に破れ自刃。義晴は武佐長光寺に、まもなく桑実寺へ入ります。翌天文元年（1532）

には定頼が同寺正覚院に義晴を迎えてここで結婚式を挙げさせ、桑実寺縁起絵巻の制作がなされました。義晴は同3年6月まで桑実寺に滞在。その後坂本と京を行き来し、同15年には義晴の子、義輝が元服し將軍職を継ぎました。翌16年定頼の婿でもある細川晴元の攻撃を受け、義晴・義輝父子は坂本に逃れ、17年には定頼が付随し一時帰京。18年摂津江口の戦で細川晴元が三好長慶に破れると、義晴・義輝父子は再び近江へ入り坂本常在寺に住み、19年5月定頼が付随し父子ともに穴太へ移ります。3日土佐光茂を召し義晴の寿像が制作されましたが、4日義晴死去（病没）。21日に葬儀が行われ、義輝は堅田を経て朽木に入ります。閏5月15日義晴像制作のために、土佐光茂は山科言継に直垂の故実を尋ねています。永禄8年（1565）5月義輝は三好義継、松永久秀により暗殺され、同10年の三回忌には、足利義輝像紙形（下絵）を光茂の弟子と伝えられる土佐光吉が描いています。そして翌11年、観音寺城は織田信長の攻撃に落ちたのでした。

絵師の土佐光茂は、桑実寺縁起絵巻制作後も、政情不安の中近江に再三逃れる義晴とますますの関係を深め、近江にも赴いたようです。死の前日の義晴から命を受けて寿像を制作。この紙形は京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵されています。



土佐光茂 足利義輝像紙型 京都市立芸術大学芸術資料館蔵

現在サントリー美術館に所蔵される「祇園・日吉山王祭礼図」も光茂筆とされ、義晴が制作に関与し、拠点とした坂本の町を都と並ぶべき場所として表象するためのものという意

見が提出されています。唐崎の松は大樹（將軍）、祇園祭は室町將軍の権威の表象として描かれ、この屏風は土地・神・人の掌握を示すものというのです。

また、静嘉堂文庫美術館に所蔵される「堅田景図」は、大徳寺瑞峯院を開いた徹岫宗九の没後、瑞峯院に住んだ法嗣の怡雲宗悦が光茂に描かせたものとみられています。怡雲宗悦は堅田の殿原衆の名家、居初家の出身でした。それで、しばしばこの地を訪れて土地をよく知っていた光茂に描かせたのでしょう。やはり堅田の町を俯瞰して、实景に基づき描かれた新時代の到来を思わせる作品です。

類品が幾種か知られる「犬追物図屏風」の模写には、図中の書き込みに「天文十九年五月大屋形義秀郷（卿）依貴命、土佐刑部少輔光茂江州観音寺御城本丸画之、蒙仰写之御記録蔵入」とあります。義秀は六角定頼の甥義実の子にあたる人物です。光茂が六角義秀の命で観音寺城本丸の障壁画を描いた、その写しということ伝えてあります。内容の真偽の確証はつかめませんが、義晴の死の直後で光茂は当時近江におり、その蓋然性は高いものと考えられています。

おわりに

このように、桑実寺縁起絵巻は、中世から近世にいたる日本絵画史の流れの中で、土佐光茂の傑作として光芒を放つものです。と同時に、周辺の光茂作品制作の経緯と合わせ見ても、近江の歴史の生き証人というべき意義を担うものであることが、おわかりいただけだと思います。足利義晴は自らの生涯を近江に遷都した天智天皇になぞらえ、桑実寺本尊の薬師如来に擁護されつつ都へ返り咲くことの祈願を、この絵巻にこめたのでしょう。

滋賀文化財教室シリーズ No.227号

発行年月日 2008年3月7日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525